

不登校対策の多様性をめぐる一考察

菅 佐和子

On the Effective Support System for Non-attendant Student

Sawako SUGA

Abstract: The number of non-attendant student in our country has increased year by year. It seemed to become one of our serious social problems. As the cause of this phenomenon couldn't be decided simply, the responsibility shouldn't be assumed to these students only. It was necessary to supply various support method to them on demand systematically.

Some ideas were as follows:

- (1) Permission to withdraw from school for rest.
- (2) Moderate approach by mail.
- (3) Reserved visit to house.
- (4) Invitation to individual psychotherapy or family psychotherapy if possible.
- (5) Introduction of tutor or mental-friend as the object of identification.
- (6) Invitation to therapy oriented small group out of school to take part in three-person relationship.
- (7) Invitation to therapy oriented small class for the practice of school life.

It seemed to be effective to combine some of these items flexibly according to the situation.

Key words: Non-attendant student, Various support method, Therapy oriented small group

はじめに

わが国における不登校児童・生徒（ひとつの目安として、年間50日以上欠席した者）の数は、中学生においては1980年頃、小学生においては、1985年頃から急カーブを描いて増加してきたとみなせよう。

筆者は、個人心理療法（カウンセリング）を行う臨床心理士（カウンセラー）として、この25年来、主に思春期の不登校事例との関わりを続けてきた。その過程の中で考えてきたことに

ついては、すでにいくつかの報告を行ってきたので¹⁻⁵⁾、ここで改めて述べることはしない。ここでは、それらを踏まえた上で、「思春期不登校の若者にとって、本当に役に立つ援助とはどのようなものであるのか、それは、どのような工夫によって供給できるのか」という観点から、現時点での筆者の考えを述べたいと思う。

思春期不登校の増加の背景

思春期不登校について考える場合、①本人自身の問題 ②親子関係、家庭環境の問題 ③学

校の問題 ④社会状況の問題 という多角的な視点から眺めなければならないのは言うまでもないことである。これらの①～④は、実は決して別個に独立して存在するわけではなく、相互に関連しあって、「一人の若者の不登校という現象」という形を作り上げているのではない。ただ、論じる側の経験や物の見方のちがいによって、いずれかに重点がおかれ、他がかすんでしまうことはなきにしもあらずであろう。

筆者自身は、基本的に「本人自身の内界に関わることで、その人の変化を促す」という個人心理療法（カウンセリング）を自らの本業として選び取ってきた。そのため、どのようなケースにおいても、原則として①を重視することになるわけである。しかし、思春期不登校の若者と関わっていると、必然的に②に関心を向けざるを得なくなってきた。また、約8年前からは、学校の先生方に対する臨床心理の立場からのスーパービジョンやコンサルテーションの機会が与えられ、③への視野が拓かれることになった。そして、①～③を通して、否応なく④への関心が高まらざるを得なくなったといえよう。

さて、精神科医である中井⁶⁾が「思春期の人たちが内外の衝迫によって『踊り場のない階段』を駆け上るように強いられていることはまぎれもない事実」と述べてから、すでに20余年が過ぎている。現在、その「踊り場のない階段」は、ますます急勾配になり、思春期の若者たちは、ますますゆとりのない生活を送らざるを得ないようになっている。たとえば、筆者が担当したある女子高校生の生活とは、「早朝に起きて学校へ。始業前に部活の朝練。授業が終わると部活。帰宅して夕食と入浴。家庭教師の来る日もある……あっという間に就寝時刻となる。一人になって自分の好きなように過ごせるのは夜中だけだけれど、遅くまで起きていると朝が起きられない……」

これでは、文字通り「踊り場のない階段」を駆け上がり続けていることになるであろう。そんな毎日のなかで、「毎日、学校へ行って頑張

らなければならないのに、身体がついていかない。でも、休みたくはない。でも、足が前に進まない」という事態におちいるのは、無理からぬことに思われる。

〈思い切って、部活やめたら？〉とカウンセラーならずとも言いたくなってくる。しかし「部活は絶対にやめられない。部活の友達とクラスでも同じグループを作っている。部活をやめたら、私だけそこからはみ出してしまう。そうしたら、クラスのなかに居場所がなくなる」。

両親は、部活などやめて、大学受験の勉強に専念したほうが将来のためになると勧めている。「子どもの将来の幸福を考えれば、何といても学歴は必要です。建前はともかく、ほとんどの人がサラリーマンになるしかない現在では、それが皆の本音なのではないですか？」

子どもは、そんな親の気持ちがよく分かるだけに、何とか期待に応えなければならないと頑張ってきたという。中学校時代も、「友達と仲良く楽しそうにしていたが、一皮むけば皆ライバルという意識がどこかにあったように思う。そのときは、そこまで考えていたわけじゃあないけれど……」とのことであった。

優等生だったある級友が、定期試験のとき風邪をひいて成績が悪かったのをきっかけに、バタリと登校しなくなったという。それまで「何でも良くできて、いつも涼しげな顔をして、悩みなんかひとつもなさそうな人」であったので、ちょっと驚いてしまった。担任に頼まれ、家を訪問したところ、とても明るい笑顔で迎えてくれ「ちょっと体調を崩して休んでいるだけ」のこと。明日から登校するとの約束をとりつけて帰ったが、結局は登校しなかった。その級友の母親から担任に「クラスメイトが尋ねてきてくれて、そのときは元気に話をしたのですが、その夜、かえって不機嫌になり、おちこんでしまった」との連絡があったとのこと。それを聞いてショックを受けた。「自分は担任に頼まれて行っただけなのに……あるとき、あの人は確かに喜んでくれていたはずなのに……」
「いったい、人の心ってどうなっているのだろ

う？ 皆、外に見せている顔と心の中で思っていることとはちがうのだろうか？ もしそうだとすれば、私は一体、何を信じて人とつきあえばいいのだろうか……そんなことばかり考えていると、頭のなかがゴチャゴチャになってわけが分からなくなってしまう」と、彼女は涙ぐみながら語ったのである。

実は、このケースは、特定のひとりの話をそのまま描写しているわけではない。現代社会を生きる思春期の若者たちが、実によく体験しているエピソードを、ひとりのケースの形で再構成しただけである。

ちょっとしたきっかけで不登校となり、家に閉じこもってしまった元優等生のようなケースも、枚挙にいとまがないほどである。精神科医であり、臨床心理士でもある山中⁷⁾は、「高い《自尊心》を持っているがその基盤は弱く、ふとしたことで《学校社会》という社会場面における適応に失敗し、家の中に深く閉じこもってしまう」ような一群の若者を《内閉神経症》と名付けている。

心身ともに、子どもから大人への急激な変化の時期である思春期は、昔から「疾風怒濤の時代」と見なされてきた。そのような時期であればこそ、多少の逸脱行動も、やむを得ぬこととして笑って許される面があったわけである。誰もが一度は通った道であればこそ、思春期という時期に対してある種の郷愁がかきたえられるといってもよいだろう。

しかし、現代社会においては、そのような「道草」は、事実上、許されにくくなっているのではないだろうか。「踊り場のない階段」では、小休止をとることがむずかしい。小休止がとれなければ、息切れをきたした若者は階段そのものから降りるしかないであろう。

階段から下りた場合、ホッとすると同時に、「皆からとりのこされてしまった」という疎外感がこみ上げてくるのも当然であろう。かつての同級生は、刻々と先へ進んでしまっている。後からは下級生がどんどん自分を追い抜いて行くわけである。その隊列のなかへどのようにし

て復帰すればいいのか、途方に暮れる思いを抱いて、立ち竦む若者は枚挙のいとまがないと見なせよう。

もっとゆるやかな、踊り場のある階段がどこかにないのであるか？ 何故、人は皆、踊り場のない階段を駆け上がらなければならないのだろうか？ その問いを、問いとして探索すること自体、本当に不可能になってしまったのだろうか？ その問いを心に抱きながら、とりあえず今ここでできる援助を順序立てて述べてみたい。

思春期不登校に対する心理的援助のあり方

(1) 深く「内閉」している時期

家に閉じこもり、誰にも会いたくないと外界からの接触を拒んでいるときには、アプローチの術は見つからないのが普通である。

この時期に、あまり強引に接近するのはかえって逆効果だろう。しばらくは、そっと「待つ」ことに徹したい。幸い、以前に比べればこの時期に「待つ」ことの必要性は広く知られるようになった。しかし、ただ「待つ」というのは、思いの外、忍耐力のいる営為である。繭に閉じこもっている「さなぎ」⁸⁾を外側から見守っているだけであるから、殻の内側で生じていることがさっぱり分からないわけである。親にとっても分からないことに耐えつつ待つというのは、口で言うほど容易なことではないのである。待つことに疲れて、強引に殻を破ってみたり、その若者のことを自分の心の中から閉め出してしまうことも、しばしば起こることである。

この時期にできることといえば、カウンセラーとしては、時折さりげない手紙を送るぐらいではないだろうか。電話に比べれば、手紙というのははるかに侵襲度の少ない働きかけ方ではないかと筆者は考えている。

教師の場合は、その他に、時折の家庭訪問という働きかけを着実に積み重ねている例も多い。無理にその生徒に会うのではなく、押しつけがましくならぬように、あっさりと引き上げ

ることが大切なようである。これらはいずれも「あなたのことを見守っていますよ」というサインを送ることに他ならないのである。

保護者の口から「カウンセラーの手紙を、あの子は封も切らずゴミ箱に捨てていました」「学校の先生の声がすると、二階に駆け上がって自分の部屋にこもってしまいます」といった反応が聞かれることも稀ではない。確かに意気消沈させられる報告ではあるが、長い先を見越して小さな布石を打っているのであるから、あまりガッカリする必要もないであろう。そのうちに「一度は捨てた手紙が、いつの間にかゴミ箱から拾い出されていた」といった報告が聞かれるようになるものである。

この時期には、保護者の不安が高まるのが普通である。「さなぎは原則としていつかは蝶になって殻から出て来るものである」ということを伝えて、保護者を支えることが重要な仕事となるのである。

(2) 他者との関わりを求め始める時期

思春期の若者という「さなぎ」は、放っておいてもある日必ず蝶になって自力で出て来るというものではない。そのためにこそ、様々な心理的援助がさりげなく供給されなければならないのである。

筆者のようなカウンセラーは、どうしても早急にカウンセリングの場へ足を運んでほしいと望みがちである。人は誰でも、自分の本業という土俵で仕事をしたいからである。筆者自身、初心者頃から、思春期の若者に対する有効な面接技法を模索してきたわけである。ただ、それはそれとして、そもそもカウンセリングの土俵にのらない若者に対する援助の方法も考えなければならないのが実状であろう。

この時期の若者がまず求めるのは、基本的に一人一人の人間関係（二者関係）である。不登校の若者たちは、学級集団での人間関係（三者関係）に挫折し、傷ついていることが多い。そのため、まず安心できる二者関係を再体験し、それを堪能して後、三者関係へ歩み出すことができるように配慮する必要がある。その意味で

は、個人カウンセリングの場は文字通り二者関係の場であるのだが、そこでの二者関係の質が「中学生」とってはいささか重荷になることが考えられるのである。ここで、わざわざ「中学生」と表記したのは、同じ思春期不登校と言っても、中学生と高校生とでは、自分の気持ちを言語化できる度合がかなりちがうことが多いためである（もちろん、これには個人差が大きく、一概に決めつけることはできないが…）。

一般に、中学生にとっては、カウンセリングの場で大人と一対一で向き合って座り、自分の気持ちを言語化させられるというのは、かなり苦痛なことであるといえよう。そのため筆者は、非言語的交流を重視してきたわけであるが、それにしても、最初から一度も足を運ぼうとしないケースに対しては奏功しようがないわけである。

そのようなケースに対しては、筆者は、保護者を通して「家庭教師やメンタルフレンドの紹介」を申し出ることになっている。その際、まず保護者に、この時期の若者にとって同一化の対象となる兄代理・姉代理の存在がいかに重要であるかを説明し、費用の点に関しても了解を得ておく必要があるのである。学業の遅れが気になっている若者にとっては、家庭教師の往訪は、それ自体、心強い支えとなる。ただし、学習指導が主たる目的ではなく、主たる目的はあくまでも「自然な形で人間関係を楽しむ」ことである。従って、往訪する大学生・大学院生には、それなりの思春期不登校に対する理解を備え、若者の気持ちをくみつつそれに寄り添っていける感性の持ち主であることが望まれよう。しかし、あまりに「カウンセリングめいた対応」は、逆効果であろう。あくまでも自然体で「隣のお兄さん・お姉さん」としての雰囲気が求められていることを忘れないでほしいものである。

また、保護者の側としては、「高い料金を払っているのだから、学習指導もしっかりやってほしい」との気持ちを自分の内部で抑えても

らうことが望まれよう。そのような保護者の期待がちらつくと、往訪する者の立場はきわめて居心地の悪いものになるからである。

それに加えて、保護者が金銭の支出を惜しむ気持ちを持っていると、子どもは実に敏感にそれを察知し、せっかくの往訪を自ら断ってしまうことさえ稀ではないのである。

経済的な事情で家庭教師を招くことができない場合や、学習指導が重荷と感じられる若者の場合には、いわゆるメンタルフレンドの派遣を依頼すればよいであろう。メンタルフレンドというのは、有償ボランティアの大学生、大学院生などが若者の元へ往訪し、学習指導以外の関わりを持つ制度であり、主に公的機関の手で派遣が行われている。無給の家庭教師として本来の目的以外の形で利用されないためにか、一般に学習指導はしないことになっているようである。公的機関からの派遣が望めない場合、保護者が個人的に知人の子女にその役目を依頼しているケースもないわけではないが、学習指導の含まれない人間関係の提供に対して金銭的報酬を支払うことは、わが国の社会通念上そぐわない面があるためか、あまり普遍化はしていないように思われる。家庭教師に対しては金銭の支払いに抵抗のない保護者であっても、メンタルフレンドに対して同等の金額を支払うつもりがあるかと問われたならば、おそらく「高価すぎる」と首を横に振ることが多いのではないだろうか。

実のところ、メンタルフレンドとして過不足なく機能することは、家庭教師として学習指導のみを行うことに比べて、はるかに気骨の折れる面があるのは周知の事実であろう。もちろん、ボランティアとして進んでその役割を担ってくれる人々が増えることは、きわめて望ましいことである。その任務は、相手のためだけではなく、その人自身の思春期の見直し、時にはやり直しともなる貴重な体験になることが多いといえよう。

それだけに、いずれはこの役割の重要性がもっと深く認知され、名目として家庭教師を名

乗らなくても、それ自体が正当な報酬の対象となる道が拓けてもよいのではないか。それと同時に、経済的ゆとりのない家庭へボランティアとして派遣された場合にも、必要に応じて学習指導も行ってもらいたいと感じるのである。

思春期の若者に対する学習指導とは、学業の遅れに伴う不安の高まりや劣等感を解消し、自己価値観を高めるために不可欠な心理的援助のひとつではないのだろうか。長い間ひとりで家に閉じこもっていれば、当然、学業の遅れは生じるものである。そもそも、学校生活において息切れをきたした原因の一つが、学業についてゆけないことである場合もきわめて多いのは周知の事実であろう。学校へ戻る以上は、この学業の問題はどこまでもつきまとう。その若者にとってそれが葛藤のタネになっているのなら、それに正面からともに取り組むことは、きわめて意義のある心理的援助となり得るのではないだろうか。

もちろん、その若者が学業の遅れを取り戻そうと頑張る気持ちになっていないときに、性急に学習指導を行うことはそもそも無理であり、無益であろう。それをするのにふさわしい「時」というのは、自然に熟すのを待つしかあるまい。関わりのなかで時が熟すを見定め、そのときに応じた援助をさりげなく提供できるような柔軟性が求められるところである。

筆者自身は、自分がカウンセリングを継続しているケースに対しても、条件を整えば家庭教師という形で同性の大学生・大学院生を紹介することが稀ではない。そして、それは概ね良い効果をあげてきたといえよう。若者たちは、普通は自分と同性の家庭教師を求める。少し先を歩いている先輩として同一化しやすいためであろう。ただ、最近の傾向であるが、男子中学生が男性の家庭教師を忌避し女性のそれを希望する例が散見されるようになった。いわゆる「年上の女性に憧れて」という理由ではなく、年長の男性と向き合うことへの忌避と思われる例が確かに存在する。これは、父親像がネガティブであり、母親の懷から出たいという思春期本来

の動きがまだ生じていないケースではないだろうか。もしこのようなケースが多くなるとすれば、それはきわめて重大な問題といえるであろう。母親の懐から抜け出したいと思いつつ抜け出せないという葛藤ではなく、そもそも男性的なものに同一化することを避けているのであるから。

ともあれ、様々な形で二者関係の体験を通して、次なる三者関係への歩み出しの準備がようやく整うというのは確かなことといえるであろう。もちろん、二者関係の水準での援助が不要なケースにおいては、すみやかに次の小集団への参加が促されてもよいわけである。いずれにせよ、すぐに元の学級に戻ることが如何にむずかしいことであるかは肝に命じておきたいものである。

(3) 小集団への参加が可能になる時期

A. 校門をくぐることに抵抗はないが、教室という集団の場には自分の居場所を見つけることができない若者にとっては、保健室、相談室などを活用した「別室登校」が、格好の居場所づくりになるといえる。そのような別室が整備されれば、再登校への敷居がぐっと低くなることは確かである。

そのような別室は、校内のどこに位置しているのが望ましいのであろうか。筆者の経験からいくつかのポイントをあげてみたい。

①校門をくぐってその別室にたどり着くまでに多くの生徒と出会う場所では困る。従って、玄関から近く、出入りの目立たないところが望ましい。生徒がたくさんいるグラウンドを横切るような形でしか玄関にたどり着けない場合は、裏門を使用可能にするなどの配慮が必要になるだろう。

②あまり大きすぎる部屋は落ち着かないので、空き教室などを利用する場合には、ロッカーなどで仕切りをして、狭すぎず広すぎずの空間を作ることが望まれる。ゆったりと座れるソファや、多目的に使用できるテーブルをおき、その部屋に入ればホッとできるという雰囲気を作ることが大切である。壁に向かって座り

たい若者のためには、隅の方にイスを置いておくことも意味があろう。物品類は、特に新しい物、立派な物である必要はない。あり合わせの物でよいが、若者の気持ちが暗くみじめになるような、あまりにも古びた物、破損しかけた物などは避けた方がよいのは当然である。廊下や屋外からのぞかれないう、窓にはカーテンがほしい。あまり無機質な感じがせぬよう、ちょっとした飾り物やぬいぐるみ、壁の絵やポスターなどもあった方がよいであろう。

③場の設定ができれば、そこにいる人材の確保である。教護教諭、教育相談担当教員など、教員がその任に当たることが多いが、多数の生徒を抱えたでさえも多忙を極めている現場の教員にとって、きめ細かな対応を要求されるこの仕事は、時にあまりにも荷の重い仕事になることもなきにしもあらずであろう。カウンセリング場面で一対一で対応するのさえ気骨の折れる思春期の若者を、他に多くの仕事をこなしながら支えてゆくのは、口でいうほど簡単ではあるまい。やはり「学校臨床心理士（スクールカウンセラー）」のような存在がその専門性を通して教員のサポートを行うことが必要であろう。また、別室で若者たちの相手をする「心の教室相談員」の導入も、教員と生徒の双方にとっての援助者となり得ることが期待される。現実には、さまざまなむずかしい問題も生じるであろうが、目標としてはそれぞれの学校のなかに若者たちの「心の居場所」が確保されることが何をにおいても急務であろう。

このような別室登校の時期を経て、少しずつ元の学級への復帰が果たされれば幸いである。しかし、元の学級と別室との間のごくわずかな距離が、若者にとってはきわめて遠く、険しい崖に阻まれているように見えることも決してめずらしくないのである。家から別室までの距離より、別室から元の学級までの距離のほうが遠いように見えるケースもあるのである。何よりも別室が、その学校のなかで孤立した場になってしまっはいけないのではないか。その若者に直接に関わる教員以外にも、すべての教員

が、別室の存在を心にかけ、折にふれて顔をのぞかせたり学習指導に訪れる体制づくりが望まれよう。また、自分の学級の生徒たちに別室への偏見をなくするような指導も必要である。級友が心からの関心を持って訪室してくれることで、少しずつ別室から教室への「橋」がかかってゆくのである。今のように、教員があまりにも多忙な毎日を送らざるをえない状況のもとでは、きめ細かな配慮を必要とする別室登校の生徒にまで手がまわりかねないのも、無理からぬことではある。教育行政における根本的な対策が望まれるところである。

B. 次に、校門をくぐることに抵抗を感じる若者にとっては、学校外の場所いわゆる「適応・指導教室」が、小集団参加の格好の場となるであろう。「適応・指導教室」のプログラムは、精神科領域のデイケアのプログラムに準じているとみなせよう。学校とちがって、学業の負担がなく、また、いじめの危険もきわめて少ない、自由度の高い小集団活動である。このような「適応・指導教室」は、どのような条件を備えていることが望まれるのであろうか。筆者の経験からいくつかのポイントをあげてみたい。

①学校以外にある建物のなかに設営されるわけであるが、ビルの上層階などではなく、地面に近い場所が望まれる。建物自体は立派なものである必要はない。むしろ、こじんまりとした素朴な感じの建物のほうが気持ちが落ち着くかもしれない。建物の周囲には、園芸をしたり小動物を飼ったりできるような空き地がほしいものである。土に根ざした生活体験ができることこそ、何にも代えがたい心の癒しになるのではないだろうか。現実には、動物の飼育は諸々の事情で無理かもしれないが……

建物のなかには、若者たちが集っていろいろな活動のできる部屋、一对一で話をしたくなったときのための部屋、静かに机に向かって本を読んだりするための部屋、卓球などのできるホール、料理をするためのキッチンなどが必要である。いずれの部屋も、それほど立派な設備

を備えている必要はあるまい。設備のために高額のコストがかかることがネックになって小集団活動の場が開設できないとすれば、それは本末転倒も甚だしいと言わねばならないだろう。若者たちの心を育てるのは、決して高価な機器ではないのである。

②物理的な条件よりはるかに重要なのは、スタッフとしてどのような人材を配置するかという点である。これは心理的援助全般について言えることではあるが、「適応・指導教室」においても、その成果の如何はどのような人材を得られたかにかかっていると看做しても過言ではないのである。

専門性という点からは、教員経験者や現職の教員の他に、臨床心理士、作業療法士などの導入が望まれる。また、年齢構成や性別もきわめて重要なポイントであろう。若者たちは、年齢の近い大学生・大学院生などにまず馴染んでゆくものである。そのような人材を有償ボランティアの形で導入することの意義は大きいといえる。将来、教職に就きたいと望んでいる学生にとっても、格好の研修の場となるであろう。もちろん、彼らを支え、時には助言・指導するのも年長のスタッフの任務となるのである。お兄さん・お姉さんの存在、お父さん・お母さんの存在、叔父さん・叔母さんの存在、そしてお祖父さん・お祖母さんの存在というように多彩な年代のスタッフがその場に存在し、そのときに応じた関わりを提供できることに意味があるとみなせよう。

専門性が近くても年代や性別のちがうスタッフどうしの連携には、当然むずかしさも伴うであろう。それぞれの専門性や人間としての持ち味を尊重しあいながら全体として協調してゆくためには、まずスタッフ自身が自分の個性をよく認識し、同時に、他のスタッフに対する共感能力を高める必要がある。それぞれが、自分のやり方のみを是として主張するばかりであれば、その空気自体を思春期の若者は敏感に察知し、足が遠のいてしまうこともなきにしもあらずであろう。自分を護り育ててくれるはずのオ

トナどうしがギクシャクしていることに対して、彼らはきわめて敏感に反応するものであるから。

このような小集団活動と平行して個人カウンセリングやメンタルフレンドによる援助が継続されることも稀ではない。むしろ、小集団への参加を通して、改めて一対一でのカウンセリングの意味を感じるようになるケースもあるわけである。中学時代を「適応・指導教室」やフリースクール、デイケアなどで過ごし、高校生になってから改めて自分の内的な課題に直面すべく自ずから個人カウンセリングを求めて来談する若者も稀ではない。その時点での個人カウンセリングの内容は、(2)の段階でのそれとは一味ちがったものになるのが普通である。

(4) 新しい進路を目指すとき

これらの小集団活動の体験を経て、同年代の三者関係のなかでやってゆけるようになった若者は、次の進路を求めて巣立ってゆくことになる。小学校においても中学校においても、卒業というのはひとつの区切りである。そこで「新規蒔き直し」の機会が訪れる。若者たちは、古いページを締めくくることより、まっ白な新しいページを開くことのほうに心が向かうようである。楽しい思い出の少ない今の学校の卒業式に出るように強く勧められるのは、苦痛なのである。卒業式に出席しなければ卒業証書がもらえないのではないかと思ひ悩む若者も決してめずらしくはない。「せめて最後だけは皆と一緒に」という学校側の思いと若者自身の思いが微妙にズレており、間に入った保護者がオロオロするというパターンも実によくあることである。「有終の美」にこだわるのは、それ自体、オトナの心情であって、これから先の長い時間に目が向いている若者にはあまりピンとこないことなのかもしれない。

筆者自身は「卒業式にこだわるより、次の入学式には出られるようになりたいね」と対応することが多いのである。とにかく、どのような新しいページがめくられるのか、これは若者の今後にとってきわめて重要なポイントといえる

であろう。その意味で、慎重で行き届いた進路指導が是非とも望まれるところである。

まず、いろいろな情報を、あまり多すぎない程度で若者自身に提示することが望まれる。しばらくは自分で考えることが必要であろう。しかし、本人には決められない場合や、非現実的な希望にとらわれているときは、じっくり話し合って助言することが必要となってくる。押しつけたものはうまくゆかないことが多いが、本人まかせにしても挫折が目に見えていることが多い。あくまでも本人の意思を尊重しつつ、現実吟味の力を育てることがポイントではないだろうか。進路の指導もまた、実はきわめて重要な心理的援助のひとつといえるであろう。

自分に適した進路に進むことのできた若者の成長ぶりには目を見晴らせるものがある。その若者の適性にあった進路へとゆるやかに船出させることが、思春期不登校に対する心理的援助の一応の締めくくりとなるとみなせよう。

もちろん、船出をした若者の船が暗礁に乗り上げることもなきにしもあらずである。そのときには、また改めて心理的援助の手をさしのべればよいわけである。その際、(1)～(4)の体験のなかで培った「生きるために必要な力」がその若者を支える資源となることだけは筆者は確信してよいと思うのである。

おわりに

1970年代の半ばに1万人に満たなかった不登校の中学生は、1990年代の半ばには6万人を突破する勢いで増加の一途をたどっている。最近では、社会人になってからの「引きこもり」という現象が、深刻な社会問題になりつつある。

このような現象について、河合⁹⁾は「根本は国全体の問題」とであると述べている。他の西欧諸国にもそれぞれ青少年の問題があるが、不登校という現象がこれほど目立つのは、わが国固有の問題であると見なせよう。

その背後には、物理的な繁栄こそが「幸福」への道であることを信じ、「機会均等」の原則のもとに皆が同じ方向を目指して走り続けてき

た歴史が存在していることは周知の事実であろう。皆が「幸福」になる道から落ちこぼれまいとして走り続けた結果、河合の指摘するように、答えの決まったテストをして「点数で順番をつける」という社会の仕組みがますます強化されていったのではないか。そのなかで、「個性」的に生きようとすれば、よほどの資質や条件に恵まれない限りは競争からの脱落者とみなされ、自己価値を低下させざるを得ないのが現状であろう。息切れをきたした若者がほんの少数であった頃には、それは本人と家族のみの問題とみなされてきた。しかし、数の著しい増加に伴って、文部省の学校不適応対策調査研究協力者会議報告（1992年）¹⁰⁾において、「登校拒否はどの子どもにも起こりうるものである」「学校生活上の問題が起因して登校拒否になってしまう場合がしばしば見られる」などの見解が打ち出されるに至ったのである。「適応・指導教室」などの試みが全国で行われるようになったのも、この時点からであるといえよう。もちろん、それ以前から、民間ではフリースクールや「親の会」の活動が草の根的に行われていたのは言うまでもないことである。

筆者は、カウンセラーとしての自分の経験から、不登校のみならずさまざまな思春期の課題を乗り越えられる底力をつけておくためには、乳幼児期からの基本的な発達課題がきちんとクリアされていることが不可欠ではないかと感じてきた。「人格の基礎工事」ともいうべき時期の子育てに積み残しが多くあった場合、激動期である思春期に、現在のような社会状況のもとで、「個人としての自分になる」という大きな課題に取り組むのはきわめて荷が重いと言わ

ざるを得ない。自然から切り離され、土に根ざした生活体験の乏しいまま、あふれるばかりの情報の洪水にさらされ、格一化した形での競争に参加せざるを得ない現在の子どもたちの心を護るためには、とりあえずオトナたちが、その悲鳴に耳を傾け、人間的な関わりを惜しみなく提供するところから始めるしかないのではないかと、感じつつ、本稿を終えることにする。

引用文献

- 1) 菅佐和子：女子中学生の不登校に関する一考察。愛知女子短期大学研究紀要，1990：23，31-39
- 2) 菅佐和子：「不登校」という現象についての一考察。健康人間学，1993：5，16-26
- 3) 菅佐和子編：事例に学ぶ不登校—思春期の心と家族—。京都：人文書院，1994
- 4) 菅佐和子編：教師がとりくむ不登校—学校のかなかでできること—。京都：人文書院，1997
- 5) 菅佐和子：不登校対策における教育者サイドと治療者サイドの相互理解と有効な連携の道を探る。基盤研究(C)課題番号08610121，平成8・9年度科学研究費研究実績報告書
- 6) 中井久夫：思春期患者とその治療者。中井久夫，山中康裕編，思春期の精神病理と治療。東京：岩崎学術出版社，1978：1-15
- 7) 山中康裕：思春期内閉 Juvenile Seclusion—治療実践より見た内閉神経症（いわゆる学校恐怖症）の精神病理—。同上，17-62
- 8) 河合隼雄：カウンセリングを考える（上）。大阪：創元社，1995：160-165
- 9) 同上，91-100
- 10) 学校不適応対策調査研究協力者会議報告「登校拒否（不登校）問題について：児童生徒の『心の居場所』づくりを目指して」。文部省初等中等教育局，1992